

確に出て来ないという根本的弱点を、一般的には言い得て置か
 ず。しかしこの端的に「である」という考え方は、シェリングにお
 いて、只単に質に対する量的なものの対立を基にして考えられて
 いたのかどうかも問題でもある(例えば映像と原像の対立等は量
 的とは言い得ない)又ノーゲルのように対立を否定的に止揚して
 次元を高次化し、その止揚における同一性を存在として考える媒
 介の立場よりも、シェリングの先述した端的な対立は、その対立
 が鋭く、然もそのままに絶対的な自己同一が成立している実存が
 考えられるのである。然も又その実存が単に非合理的なるもの
 の強調としてではなく、先述したような理性とも呼ばれるような場
 をもって考えられるのではないかと思う。しかしこれは後期哲学
 との関わりの問題として、稿を改めて考えたい。

主要書目

- ★ ナキムト、Schellings Werke Dritter Band, (Heraus. von
 Manfred Schröter)
- ★ 研究書。
- 1' G. W. F. Hegel: Differenz des Fichteschen und Schel-
 ling'schen Systems der Philosophie. (Bibliothek. Band 62
 a)
- 2' Fritz Meier: Die Idee der Transzendentalphilosophie
 beim jungen Schelling. 1961.
- 3' Rudolf Hablützel: Dialektik und Einbildungskraft. F.
 W. J. Schellings Lehre von der menschlichen Erkenntnis.
 (Philosophische Forschungen. vol. 4, 1954)

- 4' Ernst Benz: Schelling, Werden und Wirken seines
 Denkens. 1955.
- 5' Karl Jaspers: Schelling, Grösse und Verhängnis. 1955.
- 6' Dieter Jähmig: Schelling, Die Kunst in der Philosophie.
 Erster Band. Zweiter Band. 1969.
- 7' Ernst Benz: Schellings theologische Geistesansichten. (Akade-
 mie der Wissenschaften und der Literatur. 1955, NR. 3)
- 8' 藤田健治著『シェリング』(思想学説全書)一九六二年。
- 9' 西川富雄著『シェリング哲学の研究』一九六〇年。
- 10' 赤松元通著『シェリング研究』一九四八年。
- 11' 勝田守一著『シェリング』(西哲叢書第十七卷)一九三六
 年。

- 12' 西谷啓治著『Das Reale と Das Ideale』(哲学研究、第九
 卷、第十一冊)
- 13' 西谷啓治 Windelband: Geschichte der neueren Philoso-
 phie. Zweiter Band. Kuno Fischer: Geschichte der neuern
 Philouphie, Schellings Leben, Werke und Lehre.

求道に於ける難の問題

本 多 恵

三國わたいて連綿として伝統されてきた仏教の歴史とは、その

時代に生きた人々が仏教に依つて、真に自己の確立を願つた求道の歴史であるといえよう。その歴史の中にあつて難行と言われ、難信として語られるところの求道に於ける難、つまり道を求める者にあつて、難として見出されたものの本質とは如何なるものであろうか。

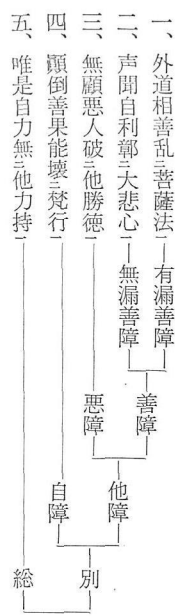
龍樹の十住毘婆沙論易行品に於ける難易二道判では、難の理由として、

- 一、阿惟越致地に至る者は、諸の難行を行ずる……修行の難
- 二、久しくして得べし……時間の難
- 三、或は声聞辟支仏地に墮す……墮落の難

の三難をあげている。この三つの内容でもって表現される難は、決して相対的な問題ではなく、菩薩道を唯一無二なる成仏の道として歩まんとする龍樹の求道の歩みの中に見出された人間存在に於ける質の問題である。その難の具体的内容である墮二乗の問題を龍樹は菩薩の死であると名づけ、大怖畏であるとする。それは畢竟して仏道を遮すからにはかならない。自己の確立を願いつつ仏道を歩む、その歩みの中に畢竟して仏道を遮し、一切の利を失するところの質を見出した。換言すれば、求道的であるという自己の相の中に、求道そのものを根底から無にするような質を見出したのである。これは正に求道に於ける甚難性であり、菩薩道を歩む者の危機感であるといわねばなるまい。龍樹にあつては不退転地に就いては完璧なまでに論じつくしたにもかかわらず、不退転地を得るといふ自身の歩みにおいて見出された求道の課題性がここにあるといえよう。八宗の祖と崇められる龍樹が自ら、偉弱

怯劣にして大心有ることなし、是れ丈夫志幹之言にあらざるなりと叱責しつつも、易行道の疾く阿惟越致地に至ることを得る方便とらば、願はくは為に之を説きたまへと願わずには居れなかつたところにこそ、量に非ざるところの求道における難の質の問題があることを明示するものである。

曇鸞は龍樹のそれを受けて、難行道における難を左の如く五つに分けている。



曇鸞は自身の求道の歩みである浄土論註の位置を龍樹の十住毘婆沙論を譚案しつつ決定しているのである。これはとりもなおさず曇鸞自身の姿勢をも決定づけることになる。

道綽は先師の心を受けつつ、仏教史観の上に立つて時機という二点で難を抑えている。

- 一、大聖を去ること遙遠……時
- 二、理深、解微……機

道綽においては末法時という時代の限定はある。しかしながらその限定を認識しつつも敢えて聖浄二門判を問わなくてはならなかつた道綽の所念の中には、常住不変なるべき仏教がどうして末

法にあっては未有一人得者であるのかと、仏法に身を置きつつ道に仏道に問うたのではなからうか。そこに見出されたのが唯浄土の一門有りて通入すべき路なりという教えであった。そしてこれぞ唯一無二の仏道であると道破したのであろう。

善導は自身は現に是罪惡生死の凡夫、曠劫より已來常に没し常に流転して出離の縁有ることなしと深信すと、ここには単的に自力無効が表明されてある。帰去來魔境には止まるべからずという悲痛な叫びにも似た善導の願ひは、自身の事実の前に出離の縁有ること無しと領かれたのである。この領きは今日まで出離の縁有りとして徒らに火宅にあった自身の分別との訣別であると同時に、聖道的存在への徹底した批判であるといえよう。

法然に至っては單刀直入に諸行は癩のためにしかもとく、念仏は立のためにしかもとくと一点の容赦もなく云い切っている。

始めに挙げた龍樹にあってはあたかも仏道修行における懦弱怯劣の者の道が念仏往生であるやの感をまぬがれ得ない表現でもって示されたものが、常に自身の現実を見失うことなく真摯に道を求めた人の歴史をくぐって、法然に至って念仏往生こそが眞の仏道であるとして開顯されてきたのである。

さてここにおいて修行において難とされたものは、私有化の問題であろう。つまり仏に成る行は仏においてのみ可能なる行であるにもかかわらず、理性に於いて仏道を求めんとする。そこにおける行は難というよりはむしろ人間に於いては絶対不可能事である。がその行を私有したと誤認したところに菩薩の死、則ち墮二乗という畢竟して仏道を遮す落とし穴があるのである。

親鸞が信巻に眞実の信樂まことに獲ること難しと表白するところの難も、とりもなおさず如來よりのたまりたる信心を私有せんとする質を云いあてた言葉であろう。つまり難とはあくまで求道の歩みの中に見出されるものであって、眞如廣大なる仏法の道理を有限なる理性の範疇にて理解し行動せんとするときに見えて来た自己の有限性である。従つて自己の有限性に覚め得ずして理性的存在なる自己に過信なるとき、自身は自己壞滅し、難と説く教えに謙虚なるとき、無限を仰ぎつつ有限をつくし切ることの出来る人として誕生するのである。

Abhidharmadīpa における極微俱生説

吉元 信行

仏教の中心思想は、いうまでもなく一切法因縁生ということであった。この因縁生のもは諸行 (saṅkhāra) とも有為 (saṅkharita) とも、あるいはまた衆縁造とも呼ばれる。その衆縁造なるものは無常變易の法であり、仏陀はそれを示すために縁起の教えを説かれ、そこにおける諸行無常なる概念が仏教の世界観になったのである。

この諸行すなわち有為なるものは、後世になると種々の法に分類されるようになる。そして、有為法に対して無為法なるものが考えられ、それも詳しく分類され、そこに阿毘達磨における諸法の分類というものが完成される。それはそのまま阿毘達磨の存在